



ようこそ



ゼロポイントフィールドへ

$$0 = \infty$$

みけ

第1章 ゼロポイントフィールド・アクティベーション

ゼロポイントフィールドは、宇宙の終わりであるとともに、はじまりでもある、ワンネスゾーンの究極です。

たったひとつの単純なものから、複雑で多様なものへと展開し、たったひとつのものへと還る。この循環運動が全部、同時に起きているのが宇宙です。

ここでは、そういうしくみの話はあと回しにして、まず、どうすれば究極のゼロポイントフィールドにつながるのか、その方法から説明していきましょう。とても簡単です。

右の掌（てのひら）と左の掌を合わせて、合掌します。

両方の掌が合わさった面に注意を向けると、両掌の境目がわからなくなり、右掌と左掌がつながっている感じがしてきます。

コツは、掌とか手とかいった「部位の概念」を捨てて、合わさった面の感覚（触覚）に、ひたすら集中することです。

しばらくそのまましていると、つながっている感じは、左右の肘あたりまで広がって、胸の前に、一本の帯があるような感じになってきます。

もうしばらくすると、つながっている感じは、左右の上腕から左右の肩、体幹まで広がってきて、掌から腕、体幹を回って、つながっている感じの輪ができます。

この輪には、ここが掌、ここからが手首、腕、肘、といった区別がありません。全部がつながって、融けているような感じがします。

この融けてる感がゼロポイントフィールドです。

正確にいうと、融けているという感覚は、ゼロポイントフィールドとつながっている、通路が開いていることを知らせる信号です。

輪ができるまでがんばらなくてもいいです。輪にこだわる必要はありません。

つながって融けている感じが、手首とか、肘のあたりとか、途中で止まってしまっても、輪にならなくてもかまいません。両手の境目がなくなり、つながって、融けている感じが、ある程度の幅として感じられればいいです。

肝心なのは、右掌と左掌という別々の部位が、つながって融けているということです。

人によっては、頭のおつぺんとか、おなかのあたりまで、つながって融けている感じが広がるかもしれません。どこまで広がっても、全身つながってしまってもOKです。

少し慣れてくると、掌全体でなくても、右の人さし指と左の人さし指でも、くっつけると、つながって融けている感じがするようになります。

指先と指先の境目がなくなり、融けている感じが、ある程度の幅に広がって、融けてるゾーンができます。

これを別の指同士で試してもいいし、左右の手首の内側をくっつけるのでもかまいません。

さらに慣れてくると、右の人さし指と左の掌とか、右の掌と右の膝とか、左の掌と額とか、左右の掌のように対称な部位でなくても、それができるようになります。

右掌で右膝を、左掌で額をさわって、「右手と右膝」「左掌と額」という二箇所の融けてるゾーンをいっぺんにつくこともできます。

要するに、どこかの部位を選んで、部位同士がつながって、融けている感じを感じられればいいのです。

対称部位からはじめるといいのは、融けてる感がわかりやすいからです。なかでも両掌はいちばんわかりやすい部位ではないでしょうか。

もっと慣れてくると、テーブルやカップなどの物にさわったり、手を空間にかざしたりしても、手と物、手と空間とが融けている感じを感じることもできるようになります。

慣れるとは、「うん、この感じ」というように、融けてる感が体験として定着するということです。

この感じ、融けてる感が定着すると、身体や物に直接さわらなくても、イメージのなかで接触させても、接触面がつながって融ける感じがしてくるようになります。

しまいには、融けてる感を意識する（思い出す、呼び出す）だけで、自分まるごとゼロポイントフィールドとつながれるようになります。

これは、ここで起きている出来事を感じさせている、いろいろな感覚が、ゼロポイントフィールドに還って融けていっているのに気づいているからです。それは一瞬のことなのに、ずっと昔からこうだったような、時間の空白に入ったような、ちょっとヘンな感じです。

でも、意識するだけでゼロポイントフィールドとつながれるようになるまで、練習しないとイケないわけではありません。

身体の異なる部位や、身体と物、身体と空間、イメージをつなげたりするのは、あくまでも、こんなこともできるという実験です。めんどくさければ、敢えてそこまでやる必要はありません。

とりあえず合掌とか、自分のやりやすい方法で、融けてる感＝ゼロポイントフィールドを実感して納得することが大事です。

第2章 ゼロポイントフィールドとつながると、どうなるのか

右掌と左掌を合わせたとき、つながって融けている感じがしたからといって、実際に両掌がくっついてしまったり、透明になったりはしません。

融けてる感を感じたからといって、何か超常現象が起きるわけではありません。

つながっている、融けているのは、ゼロポイントフィールドの「状態」であり、この融合は、見たりふれたりできない次元で起きていることです。

つながっている「感じ」、融けている「感じ」とは、ゼロポイントフィールドに気づいている（アクセスしている、通路ができている）ときの信号とっていいでしょう。

本当は、ゼロポイントフィールドは、自分の周りに広がる物理ゾーンと重なって存在している、物理世界の元元なのですが、見たりふれたり、五感ではとらえられないので、ふだん、私たちは、ゼロポイントフィールドがあることに気づいていません。その存在を知らせる体感的なサインが、つながって融けている「感じ」なのです。

何度も繰り返して、この融けてる感を体験していると、ゼロポイントフィールドが、修練を重ねてたどっていく高い覚りの境地ではなく、とても身近なものになります。ドアや引き戸を開けて、隣の部屋に行くような、すぐその感覚に。

それは、ゼロポイントフィールドが、どこか遠くの高い場所にあるのではなく、この物理次元と重なって、物理次元とともにあるからです。

物理次元とは、ゼロポイントフィールドが見ている夢とっていいでしょう。

ゼロポイントフィールドとつながると、潜在意識がきれいになり、見たり聞いたりできない、五感ではとらえられない、高次元からのお知らせが、ノイズなしに届くようになります。

高次元からのお知らせとってても、白いローブをまとい、杖をもった白髪のおじいさんが、地球の未来について語り聞かせるとか、その類の大きなことではありません。

いわゆる直感と呼ばれる感覚が頻繁に働くようになり、その精度も大幅にアップするということです。

直感を直感と意識しないくらい、いつ、どういうタイミングで、何をすればいいか、または何をしなくていいか、はっきりわかるようになります。

「なぜ、そうなるの？」

「これまで、うまくいったためしがないじゃない？」

「誰も、そんなやりかたはしてないよ」

・・・と、論理的な整合性を求めたり、過去の経験を参照したり、常識に照らし合わせたりして、“まともな”省察をするとか、うまくいかなかったときの言い訳や対策を用意しておくとか、そういう防衛反応も薄れてきて、どうでもよくなってくるので、行動に移すのも早くなります。

ことの大小を問わず、決断や選択、あるいは保留する場面で迷わなくなるので、あれこれ思い煩うことで堆積していたストレスが激減します。

すると、身も心も軽くなって、直感はますます冴え、すぐにリアクションできるようになっていきます。

ゼロポイントフィールドというのは、あらゆる出来事がすべて終わってしまったあとであるとともに、どんな出来事も起きていない次元です。

何もかもすっかり融けきってしまったと同時に、いまだ融けていて何も形になっていない状態です。空間（配置）も、時間（推移）も、いわばすっかり、そしてまだ折り畳まれた状態で、起動していません。そういう終極で始原の次元を、何度も繰り返し体験していると、常に完了であり、常に始動前というゼロポイントフィールドの時空感覚も、“融けてる感”として身近になってきて、計画、予定、条件といった制約に縛られなくなってきました。

ゼロポイントフィールドのモードで動くようになってみるとわかりますが、“まともな”省察にもとづいて計画したり、予定を立てたり、段どりをつけたりするのは、かなり疲れることです。

むろん、直感にしたがって動いた、または動かなかった結果でも、あとから振り返れば、論理的に筋道の立つ行いだった、ということは多々あります。

筋道立った手順を踏むから疲れるのではなく、事前にあれこれシミュレーションを繰り返すから消耗してしまうのです。自動でできることを、手動でやっているようなものですから。

といっても、ジグソーパズルを組み立てるとか、プラモデルをつくるとか、ロープウェイなどを使わずに山に登るといった場合の、プロセスをたどる楽しみがなくなってしまうわけではありません。

早く到達しなければとか、何がなんでもコンプリートをめざすとか、そういうあせりやプレッシャーがなくなって、かえって楽しさは増すでしょう。

私たちは、考えなくてもいいときに、考えなくてもいいことを、始終考えているために疲れてしまうのです。何度もゼロポイントフィールドにつながっていると、そうした思考の余計な動きが一扫されます。

目的地に行くのに電車を使うか、タクシーにするか。ランチのお店をどこに、メニューを何にするか。打ち合わせの日時はいつがいいか。いくつかある仕事のうち、どれから手をつけるか。誰に、いつ連絡したらいいか、電話にするかメールにするか。この集まりに出席するか、欠席するか。今日のうちに洗濯をすませておくか、明日にするか。

たいていの場合、変化は、そんな些細なことから現われてきます。

それまで、ネットで情報を検索したり、メディアの評価や友人知人の評価を参考にしたり、過去の事例に照らし合わせたりして、ココロのなかで膨大な損益計算をして決めていたことが、直感でピンときてわかるようになり、ぐずぐず迷わずにその直感に“乗れる”ようになります。すると、タクシーで行くと決めたら、タクシー乗り場に向かう前に、目の前でタクシーがつかまったとか、最初にする仕事を直感で選んだら、あとの仕事は誰かが手伝ってくれることになったとか、タイミングや必要なことが全部、自然に整うようになります。

反対に、すぐに答が出ないような状況では、答が出るまで待てるというか、半ば忘れた状態で保留しておけるようになります。

仕事で取引先に送る企画書を作成し、期日よりずいぶん前に仕上がったけれども、一点、正誤がはっきりしないデータがあって、それが引っかかるのでまだ送らずにいて、別の仕事にかかっていると、締め切り前日に、銀行のロビーで手にとった新聞に正解情報が出ていたとか。

一年くらい前に買った製品が壊れたので、粗大ゴミに出そうと思いながら、なんとなくそのままにしておいたら、二、三日して、失くしたと思っていた保証書が見つかり、まだ保証期間内で、交換もしてもらえることがわかるとか。

あらゆる出来事がすでに完了してしまっていて、まだ何も起きていない、空間は終わって閉じていると同時に開いていない、時間も終わっていると同時にはじまっていない。

そういうふうに終わりとはじまりがぴったり重なっているゼロポイントフィールドには、だんだん広がっていく空間とか、ある順序に則って移り変わっていく時間というものはありません。

どこまで行っても“ここ”で、いつまでたっても“現在”です。

なので、ゼロポイントフィールドにはタイムラグがありません。前倒しも、追い込みも、遅れもないのです。

物理次元のこのとき、ここで、何をするか、しないか。ピツ、とサインのきたときがベストのタイミングです。

ここに書かれていることを読んだだけで、すぐには納得できないかもしれません。

おそらく誰でも、直感にしたがって行動してみて、うまくいったこともあれば、うまくいかなかった経験もあるからです。

直感でピンときて懸賞やコンテストに応募してみたけど落選したとか、お店でどの服にするか迷って、最終的に直感で決めたけど、その後、一、二回着ただけだったとか、直感で仕事のオファーを受けて、あとでひどく苦労した、などなど。

直感が当たるのは偶然、だから必ず当たるとは限らない。これはもつともな、“まともな”省察です。

しかし、いろいろな選択に迷って、論理的な判断や経験知によっても決められなかった結果、最終的に直感で選んだとか、はじめからどっちでもいいと思っていて、思いつきでパツと決めたというのは、うまくいってもいかなくても、本当の直感ではありません。

本当の直感には、選択の余地はないのです。

本当の直感とは、ゼロポイントフィールドから降りてくる、純粹な意思のことです。

何度もゼロポイントフィールドにつながって、ゼロポイントフィールドが身近になり、寝ても覚めてもゼロポイントフィールドといっしょ、といった感じになると、本当の直感とは、考えるまでもなく「AだからAだ」というような、直截で、単純で、“タメ”がなく、そして大声で降ってくるものではない、穏やかなものであることがわかります。

食事のときに調味料の塩を手にとったり、本棚から本をとったり、ほとんど意識せずに行っている日常動作と同じようなノリで、直感のとおり動いて、ものごとがスムーズに運ぶのがふつうになります。

ゼロポイントフィールドにつながってなかったときは、偶然とか奇蹟とかラッキーとかシンクロニシティとか思っていたことが当たり前になるので、もうこれが直感だと意識しなくなるかもしれません。

そのうち、ゼロポイントフィールドにつながっていなかったときがどんなふうだったかということも、忘れてしまうか、リアルには思い出せなくなるでしょう。

ここに書かれていることが信用できなくてもかまいません。

実際につながってみればわかります。

私の言っていることは信じられなくても、ゼロポイントフィールドとのつながりのなかで起きてくることは信用せざるをえないでしょう。

なぜなら、ゼロポイントフィールドとつながると、筋道だった推論とか、あのときはこうだったとか、権威者の意見とか、“まともな”省察がどんどん後退して行って、薄い色彩で描かれた遠くの背景みたいになり、どうでもよくなっていってしまうからです。

ゼロポイントフィールドにつながることで、ゼロポイントフィールドへの信頼を培います。

私自身、ゼロポイントフィールドとつながるまでは、直感なんてさほどアテにはしていませんでしたし、高次存在からのメッセージの類も半信半疑な受けとめかたをしていたのですが、つながってみると、半月もたたないうちに“まともに”ものを考えられなくなってしまい、以前に比べると、ずいぶんうすらぼんやりしている感じがします。

なんというか、心身のセンサーが、ゼロポイントフィールドのセンサーである心身へと変化した感じですか。

第3章 「引き寄せられ」から「最適化」へ

精神世界でよく知られている原則に、引き寄せの法則というものがあります。

これは簡単にいうと、何かになりたいとか、何かしてほしいといった欲求がある場合、先に非物理次元で、その欲求が満たされた状態になれば、つまりその状態の波動を先どりすれば、物理次元で実現するというものです。

ゼロポイントフィールドにつながると、これとは逆向きのことが起きます。

ゼロポイントフィールドがほしいものに自分が引き寄せられていき、ムクムクと興味が湧いてきて、見たり、聞いたり、動いてみる気になり、実際に動いてみると、必要な情報、ツール、人が集まってきます。それらを使ってみると、次に必要な情報、ツール、人が集まってきて、ワクワクの連鎖のなかで、だんだん形になっていきます。

何らかの知識や技術を必要とする場合は、いくらか時間がかかるかもしれませんが、習得の動機が宇宙の根源のゼロポイントフィールドからの要請なので、興味が尽きず、気づきと驚きが次々と訪れ、面白くてしかたがなく、ちっとも努力している感じがしません。

ゼロポイントフィールドの波に乗ることを知らない人からは、がんばっているとか、努力家だとか見られることがあるかもしれませんが。

ゼロポイントフィールドからの提案やお知らせは、ゼロポイントフィールドと物理次元の間にある高次ゾーンを経由して伝えられますが、天使や精霊といった高次存在の波動をとらえるのでも、直感でとらえるのでも、どちらも同じです。

高次ゾーンからの情報が、人の話やメディアのニュースといった、物理次元の情報を介して伝えられることもあります。

過去に、思いつきでいろんなことに手を出して投げ出してしまった経験のある人は、何かに心惹かれても、また同じことを繰り返してしまうのではないかという懸念があるかもしれません。

ゼロポイントフィールドの波に乗るときは、向こうからきた波に、ただ、ふっと乗るだけなので、そんな昔のことを引っ張り出したり、検討したりする余地はないというか、そういうモードではないのですが、もし不安があるなら、見送ってしまいましょう。

その場の思いつきなら、憑きものがとれたようにどうでもよくなって、二度とめぐってはきません。

しかしこれがゼロポイントフィールドからの提案だった場合には、ネットで見た情報を友人からも聞かされるとか、クーポン券付きのダイレクトメールが送られてくるとか、必要な道具を無料で譲ってくれる人が現れるといったように、同じ案件がアプローチを替えて何度もやってきます。

二度目、三度目のお知らせは、一時間後にくるかもしれないし、五年後になるかもしれません。

ゼロポイントフィールドから高次ゾーンを通してくるお知らせのベストタイミングは、物理次元のタイムラインに則ってはいないので、物理次元の順序や通念で予測する時機と一致するとは限らないのです。

でも、ゼロポイントフィールドで実現されていることは必ず物理次元にも反映するので、「いつ」ということは気にせず、サインがきたときに乗ればOKです。

投げ出して忘れてしまった案件がブーメランのように戻ってきた実例を、ひとつ紹介しておきます。

以下の一連の出来事があった当時、私は、ゼロポイントフィールドというものがあることは知っていましたが、たまに「これがそうかもしれない？」というくらいの感触がある程度で、それほど意識していませんでした。その程度でも、“例のあの件のさし戻し”は起きるのです。

私は、2016年の11月に、『[トランジット](#)』（筆名：田辺ケンジユ／文芸社）という小説を、文庫本で出版しました。この話の主人公は、ゼロ年代に他界したセクシュアル・マイノリティの友人が原型になっていて、彼女の魂の覚醒と、そのサポートがテーマになっています。

セクシュアル・マイノリティとは、性的指向が同性に向けられる人や、性自認が身体にもとづく性別と一致しない人などのことです。

話のもとになる情報がチャネリングで降りてきたのは（当時はチャネリングということ意識していませんでしたが）ゼロ年代の終わりくらいです。これを、四百字の原稿用紙に換算すると百枚くらいの文章にまとめてみたものの、何が言いたいのかさっぱりわからないシロモノになりはてて、ボツにしました。このとき書いたものは、ファイルごと削除したので、手もとには残っていません。

そしてそれきり忘れていたら、2011年になって、今度は小説や戯曲のようなストーリー性をもつプロットという形式になって、情報がもう一回、降りてきました。全部が並列していて、時間も場所も、高次元でいっしょくたになっていて特定できなかつた情報が、順序や遠近関係をもつ形に整理されていたということです。

それで、もう一度書きはじめたのですが、また百枚くらいのところで止まってしまいました。前半の主人公の低次アストラル波動（思いや感情や気分になる波）が非常にネガティブで、しかも幾度も同じパターンを繰り返すループ構造をもっており、それを中立に観察して言語化するだけの力量がまだなくて、自分がもちこたえられなかったためです。

ちなみに、この人のネガティブ波は、ドロドロと沈没するのではなく、メラメラ炎上して延焼していくラテン的な（？）波で、あとを引かないかわりに、表出のしかたが烈しいものです。

ところが、三年後の2014年になって、ふと放置しておいたファイルを開いてみたら、さしたる理由もないのに、なぜかネガティブな波動が平気になっていました。

「(中立を0度とすると) すごく鋭角な波だけど、ただの波じゃん」

と、観察者の視点がぶれないようになっていたのです。

そのことに驚いて、ためしに最初から書き直しはじめてみると、言葉にする作業にも余裕ができていて、淡々と進んでいきます。そうして、前半のネガティブな波動がコヒーレントになる（整う）と、着地点以外は茫漠としていた後半も、クリアに見通せるようになりました。

発行所の文芸社という会社は、完成した本を書店やネット書店で販売できるようにしてくれるのですが、制作費は原則的に著者が出さなくてはならないというタイプの出版社です。私は、自分の書いた原稿を自費で出版したいとまでは思っていなかったのですが、ちょうど別の用途のためにキープしていたお金がいらなくなるという出来事があって、これをそっくり出版の費用にあてるという流れになりました。

そのほかにも紆余曲折あって、『トランジット』という本は、節目節目でいろんな不思議な出来事があって発刊に至りましたが、個人的には2014年のプロジェクト復活が不思議の頂点です。何も起きていないのに何か起きたような、このときの転換がなければ、そもそも形にならなかったのですから。

また、そのとき以後、私は他人のネガティブな言動とか、小説や漫画やドラマに出てくるネガティブな表現、フレーズに同調しなくなったので、怒ったり悲しんだりといった巻き込まれ反応が起きなくなりました。

ゼロポイントフィールドの提案へのリアクションから実現していくことは、お金を貯めて、勉強して資格をとって、独立開業して、といったように、直線的なビジョンを描けるとは限りません。

むしろ、想像すらできないことのほうが多いです。

なんでこんなことに興味があるのか、何の役に立つのか、全然わからない、でもやらずにはおれない、という感じです。

“まともな”省察モードだと、「こんなことをして何になるの」「私の生活と全然関係ないじゃん」「お金が、時間ももったいない」「いいトシをして今さら」といった類の疑念が湧きまくりませんが、ゼロポイントフィールドの融けてる感と親しんでいると、そういう省察や分析をする気が起きなくなるか、省察や分析がはじまっても、すぐ霞んでしまうので、迷いは生じません。

興味の対象が、あれこれ移り変わることもあります。

そんなふうに、生計とか将来設計と全然リンクしていなくても、興味の対象がバラバラでも、ゼロポイントフィールドからの提案に応えつづけていると、あるとき、なんとなく、大きな[グランドデザイン](#)のようなものがあるんだな、とわかってきます。

お金とか時間とか、そのときどきに必要なものが、ちゃんと賄われていることもわかってきます。

じつは、ゼロポイントフィールドが欲しているのは、物理次元がパワーを出し惜しみせず、いきいきと躍動しているときの波動です。

あとからついてくる結果は、その副産物のようなものです。

なので、その人にはその人の[グランドデザイン](#)が必ずあるのですが、それが見通せなくても気にすることはありません。

ゼロポイントフィールドの波に乗るとは、いつもハイテンションで動き回っていることではありません。ハイテンションとか熱血とかいうのは、ゼロポイントフィールドに気がついていないときの、旧式のパワーの出しかた、使いかたです。そういうものではないことが、実際につながってみればわかります。

ゼロポイントフィールドの波に乗っているのは、ひと言でいうと、平常心で疲れ知らず、といったような感じですか。

とても静かでありながら、絶えずこんこんと泉が湧いているようなものです。

何かに追い立てられているようなあせりがないので、休むときはとことん休めます。

身体のケアのために最小限必要な用事をする以外、何もしていないときがつづいても、落ち込みもしなければ、あせりもしないし、退屈にもなりません。

ゼロポイントフィールドとつながると、直感で「あ、これだ」とわかる小さな提案に応じて、ジグザグに動いているうちに、実現したことが自分の望みにかなうものだったということが、あとからわかります。

ジグザグ飛行は、自分の願いを含みながら、自分の願いを超えた大きな絵を描いていきます。それに必要な燃料や案内図は、必要なときにもたらされます。

ゼロポイントフィールドの波に乗ると、すべてがベストな配置、ベストなタイミングで動いていく。

すべてが最適化するという意味で、私はこれを「最適化の法則」と呼んでいます。

これは、引き寄せの法則が百パーセント適用されている状態とイコールです。

百パーセント適用されると、何も引き寄せる必要がなくなります。

第4章 ゼロポイントフィールドとは何か

ここからは、ゼロポイントフィールドと、物理次元やほかの高次ゾーンとのかかわりについて述べ、宇宙全体の構造と流れを説明していきます。

ゼロポイントフィールドとは、すべてがあって、かつ、何もない状態です。

“ポイント”や“フィールド”は空間の一定領域をさす言葉で、どちらにも制限があります。ポイント（点）でありフィールド（場）であるのにゼロだというのは、矛盾していますが、そうとしか言いようがないので、やむをえません。言語の限界です。

ゼロポイントフィールドというのは、論理を使った推論ではたどりつけません。じかにわかるしかないのです。

喩えていうと、大きな、透明な膜のようなものがあって、それがあまりにも高速で振動しているので不動のように観測できる、そんなイメージです。

宇宙とは、この膜が運動し、折り重なって、大小さまざまな山や谷をつくっているようなものといっていでしょう。

幾重にも折り重なって、固いカタマリとして感じられる身体や物体でも、重なり構造の大元は膜です。

どんな生物も無機物も、空間も、必ずこの膜、すなわちゼロポイントフィールドに遡ることができます。

高速すぎて不動のように観測できる波の速度が下降していくにつれ、ゼロポイントフィールドの波は、結晶をつくるように形をなしていきます。

1 $0 = \infty$ （ゼロポイントフィールド）

2 $0 / 1$ （ゼロポイントフィールドとは何かを直知している帯域。叡智界）

3 物質の原型（元素、無機物）

グループソウル（動物、植物、微生物、ウイルスなど）

モノ（単一の）ソウル（ヒューマノイド=人間）

4 物理界

2の叡智界というのは、0（ない）も1（ある）もいっしょくただったゼロポイントフィールドが、0（ない）と1（ある）に分離する帯域です。

あらゆるイベント（出来事）について、百パーセント起きて完了した状態（オン）と、可能性のカケラもない状態（オフ）に分かれて、超高速で明滅しています。

つまり、ゼロポイントフィールドが、まったく何も起きていないゼロ（オフ）と、すべて完了して終わったゼロ（オン）という、裏表の姿をとって表出する帯域です。

1と2はワンネスの帯域で、誰が、何が、といった区別はありません。誰にとっても、何にとっても、出来事の原因、情報源は、遡ればここひとつです。

ただし、ワンネス帯域の情報は、言葉、数字、図形、音、香り、味といった形に変換することはできません。

ワンネス帯域の情報を、意味のある形に落とし込むには、3のソウルの世界のてっぺんにいて、ワンネス帯域と接しているモナド（またはハイエストセルフ）、さらにはモナドの信号を仲立ちするハイアーセルフによる変換、伝達を必要とします。

モナドとハイアーセルフに質的な差はなく、モナドを上製本とすると、ハイアーセルフは文庫本という感じでしょうか。情報の中身は変わりありません。

3は、ワンネスの帯域が無数のバージョンで表出されていくソウル帯域です。

色、形、音、香り、味、触感など、物理次元で感覚を通してとらえられるものや、感情、気分といった感覚化されない波、数字や図形や言語など、出来事を表象（シンボル）にして意味づけし、伝達するための記号体系、そうした物理次元を構成する現象のもとになるパルスが、ワンネス波の個別バージョンとして広がっています。

鉱物や液体、ガスといった無機物のもとになる物質の原型と、動植物が種目などのまとまりで構成するグループソウル、人間のソウルは同一のカテゴリーです。

三者のちがいは、物理次元から見たときの構成単位にあります。

無機物は、元素やその状態（気化しているか液化しているか、など）によって振動数が異なりますが、水のソウル、酸素のソウルといったものがあるわけではなく、どの無機物も同じソウルに属しています。

要するに物質のソウルはひとつで、新プラトン主義哲学でいう「宇宙靈魂」がそれに当たります。

動植物は、蟻とか蝶、杉、猫といった種目ごとにひとつのソウルに属しています。このグループ分けは、人間がつくった分類体系と一致するものもあれば、一致しないものもあります。グループ分けの詳細については私にもわかりません。ある種の動植物と特別なコネクション（縁、結びつき）がある人や、動植物の周波数に敏感な人には、感知できるかもしれません。

ともかく、動植物はグループごとにひとつの魂宇宙を構成しており、個々の物理体は、人間でいうと細胞（セル）に相当します。それぞれの動植物は、セルの体験を通して、12のワンネス帯域がそれぞれのグループの魂宇宙として具体化し、物理化するとどうなるかを探究、観察しています。

人間は、ひとりひとり、個体ごとにひとつの魂宇宙を構成しています。

つまり、AさんとBさんは、12のワンネス帯域の視点で見るとちがいはないのですが、ワンネス帯域が無数のバージョンに分かれる3のソウルの帯域では、まったく別の宇宙を構成している存在です。ふたりの間で「あの屋根は青いね」「そうだね」といったように話が通じるのは、言語や図形や身ぶりなどの記号体系を使っているためで、記号体系がなければ、意思の疎通はできません。

ワンネス帯域を経由させればテレパシー通信が可能ですが、通信内容の記号体系への変換、翻訳のしかたは、それぞれの魂宇宙の方法にしたがうので、タイムラグや、若干の異同が生じる可能性はあります。しかし、通信内容という情報は、それぞれの魂宇宙に最適の形、最適のタイミングでもたらされるので、タイムラグや異同があっても問題にはなりません。奇妙なことですが、ワンネス帯域を経由させると、Aさんが「あの屋根は青いね」と送信した1時間後、あるいは1時間前に、Bさんが「そうだね。白いね」と受信し、それでもコミュニケーションが成り立つという状況も起きえます。

人間を物質のカタマリとして見ると、ほぼ同じ組織、生理機能をもつ「人類」としてくくれますが、感覚化されたり、観測機器でとらえたりできない、もっと大きな非物理波動帯域からとらえると、ひとりひとりが別々の宇宙をつくっている、別々の宇宙そのものであり、「人類」という類存在ではないのです。

4の物理界は、ワンネス帯域の波が、異なる周波数をもつさまざまな帯域の波へと分かれていく運動の最終過程で、波がストップモーションで止まっているような、凍結、結晶した世界（物理場）をつくっています。

この章のはじめに出てきた喩えでいうと、透明な膜が幾重にも折り重なって、山や谷をつくっているところです。

じつは、この結晶世界を完全に体験しているのは、ソウル帯域のなかでは、無機物をつくる物質の原型だけです。無機物になる物質の原型だけが、ワンネス帯域をワンネスのまま、ひとつのソウルを通して物理場まで降ろせるからです。

人間のソウルは個体単位で、動植物はグループ単位で分かれているので、じかに物理場に降りるには容量不足なのです。

人間と動植物は、ソウル帯域が物理場と接する半物理帯域（精神世界で「エーテル」と呼ばれている周波数域）に、物質の原型図を、それぞれのソウル宇宙の設計図に適合するようにアレンジさせた形で転写し、アレンジした転写図が物理化したらどうなるかを仮想した立体動画にして、本当の物理場体験に換えています。

つまり、人間や動植物は、ぎりぎり半物理帯域＝エーテル帯域までしか行けません。人間や動植物が体験している物理世界は、無機物が体験している物理場とちがってバーチャルなものです。もし、バーチャルでない本物の物理場まで降りていたら、無数のカチカチに凍結した世界に分散してしまうでしょう。

物理界とソウル界をつなぐエーテル帯域では、このように無機物のソウル（宇宙靈魂）と、人間や動植物のソウルが交わり、コラボレートしています。無機物のソウルは、人間や動植物が物理世界を知り、体験することを助けてくれています。

一方、物質の原型である無機物のソウルは、そのまま物理場に結晶していくので、最大限に複雑でも、元素の化合物の世界までしか体験しません。無機物のソウルとはそういうものなので、それでいいのですが、それだけだとワンネス帯域に潜在している無限の宇宙の姿形のうちのほんの一部しか表せないのが、人間や動植物のソウルと協働することで、もっと複雑で、総合的、多面的な交響世界を出現させるしくみになっているのです。

4の物理界は、ゼロポイントフィールドからはじまる、波の結晶化構造の終着点です。ここがどん詰まりで、ここまで来た波は、ぽーんと裏返って、最初のゼロポイントフィールドに戻ります。つまり、

$0 = \infty \rightarrow 0 / 1 \rightarrow \text{ソウル宇宙} \rightarrow \text{物理界} \rightarrow 0 = \infty$

と、ゼロポイントフィールドにはじまりゼロポイントフィールドに還る動きが、時空間の差なく全部同時に起きる構造としてあるのです（“構造”が“起きる”というのは変な表現ですが、言葉でいうとそういうおかしな言いかたになってしまいます）。

とくに深い瞑想状態に入らなくても、物理界の複数の箇所（身体、物、空間）の“面”がくっついて融けている感じになるとゼロポイントフィールドにつながるのには、このように、物理界がこの構造の終わりであり、終わりははじまりと重なっているからです。

もっとわかりやすくいうと、物理界とゼロポイントフィールドは隣り合っているということです。

面と面が融けてつながっている、とは、山と谷のコントラストが激しいために、異なる物として観測される物理界の波が、ゼロポイントフィールドに還ったときの信号です。

この戻りルートによらず、瞑想などで意識を変えていって、

4 物理界 → 3 ソウル宇宙 → 2 0 / 1 → 1 0 = ∞

と、物理界から上昇していこうとすると、とてもたいへんです。

上昇ルートをとる場合、まず、感覚の強さや質的なちがいを、それらに巻き込まれることなく認識していくと、自分がそれらの当事者ではなく、さりとは完全な傍観者でもない、当事者として感じていながら、かつ、傍観者として観察できるような静寂さが訪れます。

これは自分（内側）と環境（外側）を区別できない非二元状態ですが、ここはソウル宇宙の上位ゾーンへの入り口であって、まだゼロポイントフィールドではありません。

ソウル宇宙の上位ゾーンとは、物理界の感覚がさまざまな思いや感情の波と結びつく、同じソウル宇宙の下位ゾーンから直接影響されない帯域です。

ここで瞑想を終わらせないで、この静寂状態に、キリで穴を開けるように集中していくと、ソウル宇宙の上位ゾーンが開けてきます。

ここには、見たことのない、あるいはどこかで見た気がするけど憶えていない景色が広がっていて、ボディが光っている神々しい人物とか、ペガサスやユニコーンといった、物理界にはいない幻想動物とかがいたりします。あるいは、この世のものではない音が聴こえたり、かぐわしい香りがしたり。

ハイアーセルフやガイドスピリットと交信できるのも、この帯域です。

しかし、ワンネス帯域である $0 = \infty$ や $0 / 1$ とのつながりがないか、もしくは弱いままここに長居すると、異次元存在の言いなりになってしまったり、物理界に戻るのがイヤになったり、物理界に戻ったあとの平常の心身状態に変調をきたすなど、危険な事態になる可能性もあります。

ソウル宇宙には、物理界まで分離しない（降りてこない）周波数もたくさんあって、物理界に向かう波をサポートしてくれる周波数もあれば、妨げになる周波数もあり、玉石混淆だからです。

なので、仏教などの伝統的な精神世界体系は、ここを魔境と呼んで、囚われないように勧告しました。

といっても、さまざまな周波数が、天使的な存在（善）と悪魔的な存在（悪）に分かれているわけではありません。ワンネス帯域とのつながりがないと、下位ゾーンに構築されている自我（エゴ）がソウル宇宙の働きに制限をかけるので、全体がいびつになって、いびつな生態系から益虫と害虫の区別ができるように、こうした玉石混淆状態になるのです。

ソウル宇宙上位ゾーンの眩さに惑わされず、ここで見聞きすることを、一段階前の非二元状態のときのように観察して、さらにキリキリと集中度を上げていくと、オフとオンだけでできている0/1世界、叡智界に入ります。

ここはもう、視覚的な景色とか、香りとか、高次“存在”といったように、物理界にあるものに変換、翻訳できるようなとらえかたはできません。

喩えるなら、全知全能で融通無碍、どんなことでも可能な無辺の“舞台”だけがあって、無数の信号の明滅が、この舞台の鼓動になっている、とでもいうような感じです。

この舞台に、ふだん「私は～」と言っているときの「私」は一片も存在しておらず、言葉で表すと「私が生まれておらず、したがって死んだあとでもない、存在した可能性が一パーセントもない世界」という感じに近いのですが、それでいて、この舞台が私であるという当事者感があります。

瞑想や坐禅など、意識を調律し集中させていく何らかの方法で到達できるのはここまでです。しかし、何かの拍子に、0/1の明滅速度が限界に達した感がきて、どっかーん、とバーストすることがあって、そうすると、「“ある”だけがある。なのになんにもない」とでもいうしかないところへ抜けます。そこがゼロポイントフィールドです。

・・・以上のように、物理界から上昇していくルートは、ワンネス帯域に突き抜けていくのに非常な集中力を要します。

最初の非二元状態は静かで明澄で、ここがゴールだと思えるような感じがありますし、ソウル宇宙はとても魅力的なので、途中で止まってしまうことも少なくありません。

それでも、私たちがゼロポイントフィールドを体験しようとするれば、この上昇ルートによるしかなく、戻りルートではなかなか体験できませんでした。身体の部位など、面と面を接触させて、感覚のちがひ(=周波数のちがひ)に意識を集中させるくらいのことでは、ゼロポイントフィールドからの信号はとらえられなかったのです。

なぜかというと、宇宙全体の観察の力点が融合ではなく、分離に向いていたからです。

ゼロポイントフィールドを起点とする宇宙の結晶化構造は、0/1の帯域(叡智界)を通して、自身の分離と融合という、呼気と吸気のような運動を観察しています。

この観察の力点が、物理界のなかの地球というエリアのタイムラインでいうと2013年前後の時期に、分離方向から融合方向に反転しました。

それまで、 $0 = \infty$ から0/1へ、0/1の無数のバージョンであるソウル宇宙へ、そのソウル宇宙の結晶である物理界へと、波が分かれて帯域化していく方向をメインに観察していたのが、 $0 = \infty$ へ還っていく方向へと、観察の力点が移ったのです。

この大きな流れのシフトのために、物理界からゼロポイントフィールドへと還っていく戻りのルートに気づきやすくなったのです。

瞑想や坐禅、気功、ヨガ、呼吸法などのさまざまな修練がムダというわけでは決してありません。それらの方法も変化を加速させるし、丁寧にとり組むことによって、たくさんの気づきをもたらされるでしょう。

また、戻りルートでゼロポイントフィールドとつながると、上昇ルートでの意識拡大もスムーズになるでしょう。

上昇ルートにつながる修練、儀式のデータをたくさんもっている人（いわゆる過去世で修行したり、儀式を授けたり受けたりした記憶がある人）は、ちょっと意識の周波数が変わる（変性意識になる）と、すぐソウル宇宙に飛んでしまうので、むしろ上昇ルートのほうになじみがあるかもしれません。

どちらにせよ、どんなやりかたでも、自分にじっくりくる方法をとればいいと思います。

宇宙に数多のソウルのバージョンがあるのは、多彩な体験を通して、多彩な宇宙を知るためなのですから。

第5章 ゼロポイントフィールドとつながると、ものが最適化する理由

第2章で、「ゼロポイントフィールドとつながると、潜在意識がきれいになり、見たり聞いたりできない、五感ではとらえられない、高次元からのお知らせが、ノイズなしに届くようになる」と書きました。

潜在意識がきれいになるとは、第4章に出てきたソウル宇宙が整うという意味です。

ソウル宇宙は、ひとつひとつが $0 = \infty$ と $0 / 1$ からなるワルネスの帯域を反映させたバージョンであり、ひとつひとつがワルネスの化身であって、完璧です。

なので、整っている状態とは、ワルネス帯域がそのまま百パーセント、それぞれのソウル宇宙に反映されていることをいいます。すると、それはそのまま百パーセント、物理界に反映されます。

つまり、

$0 = \infty \rightarrow 0 / 1 \rightarrow$ ソウル宇宙 \rightarrow 物理界 $\rightarrow 0 = \infty$

このいずれのゾーンにも $0 = \infty$ が百パーセント反映されて、きれいに $0 = \infty$ へと還っていく流れになります。

ゼロポイントフィールドとつながっていないと、この百パーセントの反映が阻害されて、めぐりが悪くなり、宇宙全体の構造がいびつな形にゆがんでしまいます。

こういう問題が起きるのは、ソウル宇宙の下位ゾーンに、物理界で起きた出来事に反応して、思いや感情のもとになる波を引き寄せ、これらを思いや感情として感知される周波数に編集し、この思いや感情の周波数に乗っかって（同一化して）、物理界を操作しようとする構造体があるためです。

構造体のふるまいは、ワルネス帯域を反映させたソウル宇宙の意図と一致していません。

感覚から何らかの出来事が構成されるつど、思いや感情を、下位ゾーンに張られている記号体系にあてはめて、過去はこうだったから現在こうなったのであり、このまま行けば未来はこうなるといったように線形時空化したり、独自の解釈をしています。そして、その独自の解釈にもとづいて、物理界で身体化している部分（自分）に対し、強い指令を発しています。

こうした構造体の影響力のために、上位ゾーンのサインは着信拒否されたり、伝言ゲームの伝言のように変形してしまうのです。

ソウル宇宙の下位ゾーンという言葉は、第4章にも出てきました。ここは「熱い」とか「低い音だ」といった身体感覚にはならないものの、言葉、身ぶり、絵などの記号を媒介させることによって表現できるくらいには、見えない波が具体化してくるところです。

物理界では分離しているAさんとBさんが互いに交信するために使う記号体系のルールが、時代や地域によって異なりながらも、一定範囲の共通ルールとして定着しているところでもあります。

物理界を操作しようとする構造体は、こうした記号体系の情報をたくさん収集し、駆使しているデータセンターでもあります。

この構造体を、精神世界では「自我」または「エゴ」と呼んでいます。どちらも心理学から借りた用語です。

自我、またはエゴは、精神世界ではものすごく評判が悪く、こいつさえいなければすべてうまくいくみたいな、諸悪の根源のように扱われています。

けれども、自我は、もともとひとつの場で起きている波が折り重なり、凝集している物理界を、Aさん、Bさん、机、床、イチョウの木、犬、というように、はっきり分離した別々の固体として識別し、分離した固体同士の相互作用として体験するための装置にすぎず、悪いものでも善いものでもありません。

自我は、身体も含めた物理界で起きていると感じられることを自我自身に関連づけて（統覚意識をもって）、分離した固体の数々を言葉や身ぶりなどの記号で表象し、ひとつの世界像に束ねています。

もし自我という装置がなければ、ごつごつしていたり、滑らかだったり、緑色だったり、甘かったり、曲がっていたりする、そういう数多くの感覚情報が統一した場面にまとまらないでしょうし、別のソウル宇宙である他人と、互いに分離した状態で交流することもできないでしょう。

つまり、自我の本来の役割は、ワンネス帯域からソウル宇宙の上位ゾーンを通して降りてくる信号を、最も適切な記号に翻訳して、分離した世界で使えるようにすることです。

ではなぜ、自我は、ソウル宇宙の上位ゾーン（ハイアーセルフやガイド存在など）の信号を翻訳して適用するのではなく、物理界の出来事への反応である思いや感情を翻訳して、それを物理界の操作に用いることに汲々とするようになったのでしょうか。

構造体とはいえ、自我には、独自性をもった実体はありません。基本的には、他者の意見の否定からできあがっている、中身は空っぽのハリボテ構造です。

「私」というのは、もともと一個の存在としてあるわけではありません。

まず、どんな感覚もはっきりとは区別できない、一体となった非二元状態があります。何らかの感覚が感じられても、さざ波程度の強さで、根っこは一体の非二元状態とつながっています。この非二元状態は、上昇ルートでワネル帯域に向かうとき、ソウル宇宙の上位ゾーンへの扉を開く非二元状態と同じです。

ここに、寒いとか固いとか、それまでより刺激の強い感覚入力があったとき、強い感覚への違和感から、その感覚をもたらした対象がある、という感じが生じます。この異様な感覚をもたらした異物がある、と。この異物が「外側」です。

異様な感覚は、一体だった非二元状態に亀裂を走らせ、外側というものを生じさせます。

外側は、母親とか父親などの身近な保護者、兄、姉、床、壁、天井、といったように、それぞれ異なるものに分かれていきます。

これらの外側ではない側、外側を外側と認識している側が「私（自我）」になるのです。

一度「私」が立ち上がってしまうと、「私」は、「外側を外側だと認識している外側ではない側＝私」の「これはちがうよ」という外側認定に同調してくれる存在を、排除している外側に求めはじめます。

「これはちがうよ」という外側認定に同調してほしいとは、外側を排除するために引いたラインの形状を認めてほしい、言い換えると、このラインで成り立っている「私」を認めてほしいということで、これが自己承認欲求の正体です。

もし、相手が「このラインのとおりだね。たしかにこの線の向こうが外側だ」と、ラインの形状をそっくり認めてくれれば、その相手は、「外側ではない側＝私」の側に入ってきて、「私」と同じ見かたをしている、「私」と一体化していることになりませんが、そうなったらもうその相手は外側ではありません。

ところが、当の相手はまぎれもなく外側に属しています。「私」は外側の区別、排除によって立ち現れたのですから、その「私」がいる限り、外側は外側でありつづけます。

つまり「私」がいる限り、自己承認欲求が完全に満たされること、つまり外側が消えて一体化すること、非二元状態が回復することはないのです。

実際には、「私」は違和感を感じるつど、外側を排除するラインを見直し、引き直しているのに、外側にいる存在たちは、同調することもあれば拒否することもあり、そうした外側の反応によって「私」の形状も不安定に揺らいでいます。

「私」としてできあがるためにあらかじめ排除した存在たちに向かって、「私」を認めてほしいと迫るのは、矛盾した、無理な要求です。

「私（自我）」が物理界の出来事への反応である思いや感情に過敏で、絶えず思いや感情を記号に翻訳して、物理界のコントロールに使おうとするのは、この矛盾に気がついておらず、どうにかして要求を通そうとがんばるためです。

つまり、際限なく自己承認欲求が発動されるからです。

これを止めたくても、「外側 vs. 外側でない側＝私」の体制のまま外側に働きかけていては、堂々めぐりするだけで、きりがありません。

この体制の起原である線引きと、線の向こう側の排除をやめる必要があります。

1 瞑想などの意識集中によって、物理界の出来事への反応に反応するのを鎮め、感覚も、思いも、感情も、感じながら傍観できる非二元状態になる（上昇ルート）

2 感覚が融けている感じからゼロポイントフィールドにつながる（戻りルート）

といった方法で、線引き前の一体状態を繰り返し体験し、なじませていくことです。

すると、「私」が外側に追い出していたものは、すべてソウル宇宙に属しており、魂全体を構成する仲間であること、何もかも一体であり、「私」もいなければ外側もない、ソウル宇宙しかないのだということがわかり、果てしのない承認欲求は終わります。

外側からの承認を必要としなくなった自我は、妄動しなくなり、上位ゾーンの波を適切な記号に変換するという、本来の翻訳装置に戻ります。ソウル全体からすると、この自我本来の役割は黒子のようなもので、重要な仕事をしているのに、目立ちません。ソウル全体に溶け込んだかのように透明化している、それが自我本来の姿です。

ただし、先に書いたように、1の上昇ルートをとると、ソウル宇宙の極点であるモナド（ハイエストセルフ）とつながるか、0/1へと突き抜けていくまで、自我の自己承認欲求を徹底的に観察しつつづけて、その影響を振り切らなければなりません。ワンネス帯域とつながるまで、外側と「私」の線引きは消えず、自己承認欲求が残りつづけるからです。

第6章 自我（エゴ）のひみつ

Aさん、Bさん、机、床、イチョウの木、犬、といったように、物理界を分離したものの同士の相互作用として体験するための翻訳装置である自我は、一体の状態に起きた異状を感覚でとらえ、異状の原因Xを外側とすることで、外側ではない側として「私」の輪郭を規定していくのでした。

そこで確立した外側が、さまざまな異状の原因のヴァリエとして、保護者、兄、姉、床、壁、天井といった別々の対象物に分離していきます。

このプロセスは、

$0 = \infty \rightarrow 0 / 1 \rightarrow$ ソウル宇宙 \rightarrow 物理界

と、ゼロポイントフィールドの波が分離していく、宇宙の結晶化構造のできかたとそっくりです。

自我という輪郭だけの構造体をつくっているのは、「～ではない」という、否定形のコード（短いプログラム）です。

Aさんではない、Bさんではない、机ではない、床ではない、イチョウの木ではない、犬ではない、あの人は、この物ではない・・・というように、「～ではない」のが「私」。「～」に入るものは、つまり否定されるものはすべて外側として排除されます。

自分の周りには多くの人がいて、自分も、その人たちも、それぞれ個性的な「私」をやっているように見えますが、本当の「私」は「～ではない」という一片のコードでしかありません。そのときどき、「～」に入れているデータがちがうだけです。

じつは、「～ではない」というコードが最初に使われたのは $0 / 1$ （叡智界）です。

$0 / 1$ 帯域では、「～ではない」によって、「0（ない）ではないものが1（ある）」「1（ある）ではないものが0（ない）」というように、 $0 = \infty$ が分割されています。

「まったく何もなく、かつ、すべてがある（＝何もはじまっておらず、かつ、何もかもが完了して終わっている）」

これが、

0（ない＝何もはじまっていない）

1（ある＝何もかも完了している）

というふうに分割されているのです。

0（ない）にとっては1（ある）が外側（異状な波）すなわち対象、1（ある）にとっては0（ない）が外側（異状な波）すなわち対象になります。

この最初の分割によって、「はじまる前」と「完了」がウロボロスの蛇のようにつながって一体だったのが、「はじまる前＝オフ」状態と、「完了＝オン」状態とに分けて見るができるようになります。

さらに、このオンとオフが組み合わさって、「001010001110・・・」「010101111010・・・」といった無数のまとまりをつくっているのがソウル宇宙です。空間や時間もここで発生しますが、配置、構成、順序、速度は自在に組み立てたり解いたりできます。

無数のソウル宇宙が、オフ（0）とオン（1）の組み合わせからできているということは、0/1帯域で使われた「～ではない」のコードが、この帯域でも動いているということです。

ソウル宇宙の高次帯域（高次存在）同士は、このコードを使って互いを識別していますし、ソウル宇宙同士が交流する（ハイアーセルフ同士のコンタクト、ハイアーセルフを介した、それぞれの宇宙の高次存在同士のコンタクト）ときも、このコードが作動します。

でも0/1は、オンとオフが互いに相手に自分を認めさせようとして、ソウル宇宙を操作して覇権争いをしたりはしていません。

ソウル宇宙や、ソウル宇宙の高次存在たちも、他者に認めてもらおうと、ソウル宇宙の下位ゾーンや物理界を作為的に操作したりはしません。

これらの帯域がしていることは、より根源に近い帯域（0/1にとっての $0 = \infty$ 、ソウル宇宙にとっての0/1）の波を、より具体的にしていくことだけです。

なのに、ソウル宇宙の下位ゾーンにあって、翻訳を担当するはずの自我構造体にだけ、自己承認欲求の際限のない発動が起きています。

輪廻とは、魂（ソウル宇宙）ではなく、自我についていえることで、承認欲求が延々止まらず無限ループすることをさしています。

自我の本来の役割は、上位ゾーンからの信号を、物と物とが分離している物理界で使える記号へと翻訳することでした。しかし自我は、ほとんど、あるいはまったくその仕事をしておらず、物理界の出来事への反応である思いや感情に反応して、思いや感情を中空の構造体の中身だと思い込み、これらを言葉などの記号に翻訳して、物理界を思いどおりに（承認欲求が満たされるように）動かす道具にしています。

自我もソウル宇宙の一部であり、同じソウル宇宙の上位ゾーンからの信号は届いているはずなのに、自我は信号を無視したり拒否したりしています。

どうしてそんなことになってしまったのでしょうか。

謎を解く鍵は、「～ではない」という否定形のコードにあります。

「～ではない」は、宇宙全体が $0 = \infty$ にはじまって $0 = \infty$ に還るように、ぐるっと回る構造をもっていて、最後は「～ではない」自身も否定して、コードが作動する以前の一体状態に戻し、自身も一体状態に還っていきます。つまり、

「“～ではない”ではない」→「～である」

$0 / 1$ も、ソウル宇宙の上位ゾーンも、この回文コードを使って、分離するつど融合しています。 $0 / 1$ には時空はありませんし、ソウル宇宙は時空間を自在に使っているので、分離すると同時に融合するといったほうがいいかもしれません。

ただソウル宇宙の下位にあって、物理場を像として体験するエーテル場へ橋渡しする自我構造体のところでだけ、コードが途中で切れてしまって、「～ではない」で終わってしまっています。

そのために、自我は、物理界から何か反応が返ってくるたびに際限なく外側（対象）をつくりだし、外側ではない側＝「私」への一体化を求めて、自身が排除した対象に承認を求めるという空回りをつづけるのです。

もし否定コードが完全な回文コードなら、自我は、分離しながら分離したものと一体になっている状態になり、自身がソウル宇宙の一部であるとわかっている黒子的な帯域（存在）に戻ります。

「“～ではない”ではない」という回文コードは、 $0 = \infty$ が波の分離を体験して $0 = \infty$ に還ることを象徴するコードで、もともと $0 = \infty$ に潜在していて、 $0 / 1$ でコードとして具体化されたものです。

宇宙の結晶化構造を時空間展開してみたとなると、創造のもとになった根源コードとみることもできます。地球人の文化に即していえば「神のコード（ディヴァインコード）」といってもいいでしょう。

地球人も組み込んでいるはずのこのコードの戻り部分が封印された原因については、いろいろなストーリーがあります。物理界を超える帯域で起きた戦争のためだとか、大規模な惑星破壊の影響だとか、そのストーリーはソウル宇宙によって多様です。共通しているのは、物理場のなかには多くのソウル宇宙が接地している焦点ポイントのようところがあって（地球もそのひとつ）、そこではモノソウル（人間型）と動植物のグループソウル、物質の原型ソウルとの協働関係が整合しなくなり、それが大規模で劇的な環境変化を招き、一種の非常措置として、最も多様性のあるモノソウルが、自身の回文コードの戻り部分を封印した、ということです。

物質の原型にも、動植物のグループソウルにも、人間の自我に相当する構造体はありますが、回文コードの戻り部分がきちんと機能しているので、問題は起こりません。両者の自我は、ソウル全体のセンターであるモノド（ハイエストセルフ）の波を忠実に具体化していく現場監督のようなものです。なぜそういう構造体が必要なのかというと、物理場では三つのソウル（物質の原型、動植物のグループソウル、モノソウル）が協働するからです。

物質の原型の自我は、物理場での物理法則を、動植物のグループソウルの自我は、人間が一般的に本能と呼んでいる生得行動を統括しています。ソウルの波が変化すると、めったに変わらない物理法則や生得行動にも変化が現れます。

ちなみに新プラトン主義哲学は、物質の原型の自我と、動植物の自我とをあわせて「ピュシス（自然）」と呼びました。ピュシスは、物理場の細部の設計を調整、指揮しているとはいえ、それぞれのモノドを忠実に反映させるので、現場にいるモノドの同位体（ハイアーセルフ）といってもいいくらいです。

地球人の場合は、大規模な環境変化によって地球物理場から引き上げるモノソウルも多かったのですが、残ったソウルたちは、自分たちにとって厳しくなった環境に適応するため、いったん単一ソウルであることをやめ、動植物の個体（セル）のようにまとまって、集団のなかで役割分担することにしました。本当は単一ソウルだけど、「人類」というグループソウルを仮設定して、ここに属するかのようにふるまったわけです。回文コードの戻り部分が活着していると、たちまちソウルに回帰してしまうので、セルのふりをするために、このとき戻り部分を封印したのです。

このとき仮設定したグループソウルもどきが、集合意識と呼ばれるものです。本当のグループソウルではないので、実体は、さまざまな集団意識の合衆体のようになっています。

「人類」化した地球人を支援しようという高次存在たちもいましたが、“ソウルをだます”ことから生じた自己承認欲求の暴走という副作用（人間が本当にセルだったら、自我がないか、非常に弱いので、こうした副作用は起きません）から、人間には彼らへの依存傾向が生まれ、もともと過干渉ぎみだった彼らの姿勢と変な具合に調和してしまい、支配者と被支配者のような歪んだ関係ができてしまいました。

人間が回文コードの戻り部分の封印を解けなかったのは、これらの出来事が起きたときのモードのまま意識を固定させ、奴隷だとか、戦闘員だとか、何々族の運命に責任をもつ首長の家系の一員だとか、「人類」のひとりだとか、人類のオスまたはメスだとかいったように、自分は何らかの集団に帰属していると信じ込んできたからです。

ゼロポイントフィールドにしてみれば、それもまた、色彩のきらめきのひとつ、幾多の冒険のひとつにすぎないのかもしれませんが。

なお、地球物理場に降りたモノソウル（人間）は、はじめは、物質の原型や、動植物や、他のモノソウルとじかにやりとりできるようなサイン（意識信号）を使っていました。しかし三者の協働関係が崩れていくにつれ、チューニングがむずかしくなり、音声言語や身ぶりのような記号を使わざるをえなくなりました。代替にした記号は、もとのサインに解凍されて伝わるので、いくらかタイムラグができるものの、交信そのものは可能でした。この代替記号が高次記号（ライトランゲージ）です。

ところが、モノソウルが偽のセルになってしまうと、戻りコードがないので他のソウルとつながれず、交信できなくなっていました。

また、偽のセルは本当のセルではなく、それぞれが自我を組み込んでいるので、自動的に役割分担するか、統一された集団としてふるまうということができません。この難点をカバーするのに、高次記号の形だけを借りて、集団ごとに意思伝達の手段として使える共通記号を用いるようになりました。

現在使われている記号も、うっすらとはありますが、高次記号や、そのもとの意識信号との関連を残しています。人間が戻りコードに気づき、ソウル宇宙存在になるにつれ、さまざまな記号はそのルーツの機能を回復させ、ルーツに融けていくでしょう。

上昇ルートをとるにせよ、戻りルートによるにせよ、ゼロポイントフィールドとつながることは、封印を解いて、完全な回文コードを回復させることを意味します。

瞑想したときに段階的に訪れる非二元状態、面と面を合わせたときの融けている感じは、回文コードが復活、作動して、一から多へ、多から一へと、宇宙全体がめぐっていることの信号です。

あらゆる物、あらゆる出来事を当事者として感じながら見守っている「私」、この統覚意識はもともとゼロポイントフィールドのまなざしであり、「私」とはそれではないのです。

おわりに

ムー、レムリア、アトランティス。

地球物理場が集ったモノソウルたちの宇宙が交流するそうした文明は、伝説ではなく、史料から構成される特定の時空間（歴史的事実と呼ばれるもの）でもありません。

それらは、分離していながら融合しており、融合していながら分離している、夢と知って夢を見ている意識状態を表す符号であり、そうした意識状態への道標です。

それらは、太古にあった文明ではなく、私たちの意識の奥底の、私たちが気づいていなかった意識状態です。

ゼロポイントフィールドとつながった人は、自身の意識として、この意識状態を見いだすでしょう。

壊れた自我が、自己承認を妨げる出来事から壊れた自我を防衛しようとして繰り返す硬直した時空間には、「今、ここ」はどこにもありません。

かつてこうだったから、現在こうなっており、その延長にある未来にはこうなるだろう。

これこれの出来事は、朝夕のサイクルのように、またやってくるだろう。

そのような線形の場面展開に乗っていると、明瞭にわかる時空間は、直近の過去の場面（現在完了場面）だけです。いつであろうと、はっ、と意識したときにはすっかり終わっており、とり返しがつきません。ために、現在完了から過去を参照し、推移を延長させて未来に対処する、という反射行動が延々と止みません。

私たちが、分離してとらえていた現象の融合に気がつき、ソウル宇宙であることに目覚め、魂全体を通してワンネスであるとき、はじめて「今、ここ」がわかります。ソウル宇宙には“本来現在場面”しかなく、それは永遠の別名だからです。

虚空は、虚空ではないものとして虚空ではなく、“虚空ではない”ではないものとして虚空です。

この著作物は、私の宇宙存在版であるアルクトウルス存在アリョーシャとのチャネリングにもとづいて作成しました。助言、協力してくださった多くの宇宙存在たち、そして読んでくださった読者のみなさま、ありがとうございます。

<まとめ>

1 面と面の“融けてる感”からゼロポイントフィールドとつながる。

または、瞑想などで意識を集中させ、ゼロポイントフィールドにつながる。

2 自我は、外側に自己承認を求める必要がなくなり、透明化して、高次波の翻訳装置に戻る。

3 高次ゾーンからのサインがじかに届き、わかりやすくなるので、それにリアクションする。

4 ものごとが最適化する。

ようこそ☆ゼロポイントフィールドへ
<http://p.booklog.jp/book/111478>

著者：みけ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mikeneko1227/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/111478>

電子書籍プラットフォーム：パブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト